



発行所 十勝毎日新聞社 千080 帯広市東1条南8丁目 電話=編集@2121、広告@2323、総務・販売@2222 ©十勝毎日新聞社 1987

★アメリカ★ 宇宙開発最前線

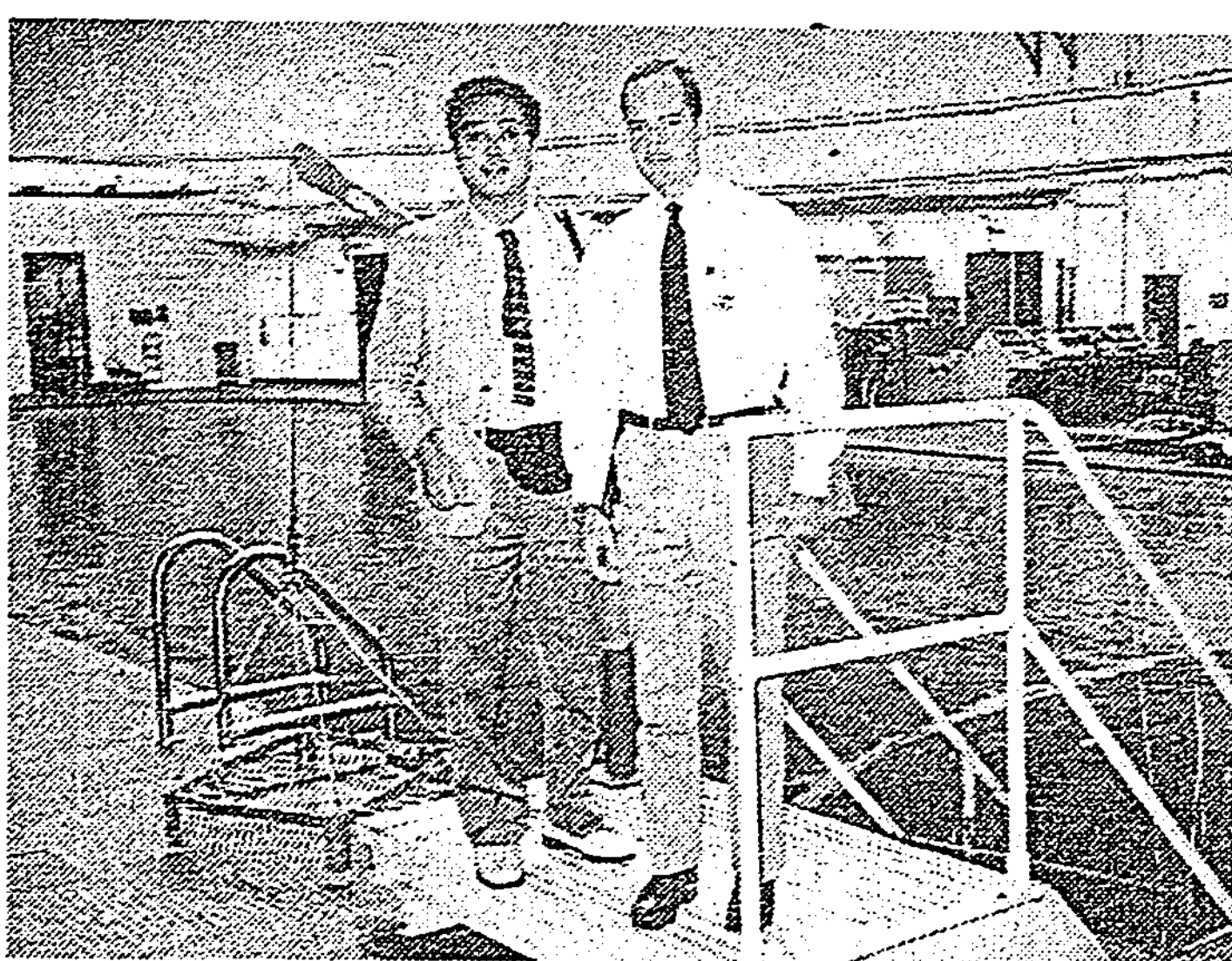
<6>

ハツビルを離れ、テキサス州ヒューストンに向かった。真つ平らの原野の中から急に超層のビルが立ち並ぶ都市が見えてくる。人口百六十万人、周辺を大都会だ。

「宇宙は挑戦的」
これら企業とNASA (ジョンソン・スペース・センター) を結びつけているヒューストン大学に足を運んだ。二月に大樹町を視察しているラリー・ヘル教授に偶然会った。教授は北海道はコル(石炭、ヒューストン)はオイル(石油)を持つが、いずれも価格低下など共通の問題を抱えている。やはりさまざまな部門に産業を進めていかなければと思う。その点、宇宙

ハツビルを離れ、テキサス州ヒューストンに向かった。真つ平らの原野の中から急に超層のビルが立ち並ぶ都市が見えてくる。人口百六十万人、周辺を大都会だ。

ジョンソン宇宙飛行士訓練用プール



今夏大樹に来たロウ宇宙飛行士と記者。バックは宇宙飛行士訓練用プール

代表者からクリアレーク地区を核に「宇宙協会」(経済発展協会)が組織され、宇宙産業をテコに地域を発展させる取り組みを聞き、ヒューストンが宇宙にかける意欲をますます知らされた。

米の宇宙開発の差はあまりにも大きい。
そんなことを考えながら、インフォメーションセンターに行くと、テレビモニターに「マッシュル・センター」の宇宙飛行士が笑顔で迎えてくれた。ロウ飛行士は八月大樹町で開かれた国際宇宙移動大学に参加して、子供たちを喜ばせてくれた。その時、ヒューストン

月のスペースシャトル再開ではミッション・コントロール・センター(MOC)に入管制センターのことに入った。シャトルの飛行士を通じて連絡を取り合う責任者になる。そのシミュレーションに今、全力投球している。もちろん自分が宇宙にいく訓練もしている。上と答えた。

ロウ飛行士と再会 シャトル再開へ訓練中

変な作業と思うが、こんなデカイ物を宇宙へ打ち上げた。アメリカのパワーはやはり大したものだと感心させる。日本が誇るHIIロケット(六十七年打ち上げ予定)が全長四十八メートル、その二・三倍の代物が、二十年前、月へ人を運ぶ大仕事をしているのだから、

「大樹町の家庭に民泊して、おちそうしてもらったの。HIIロケット(六十七年打ち上げ予定)が全長四十八メートル、その二・三倍の代物が、二十年前、月へ人を運ぶ大仕事をしているのだから、

「こちらヒューストン」で有名な管制センター
スに座り別室で約百人が入りとりをサボートする。ちょうどフライト・ディレクターが席に座り、訓練を行っている最中だった。女性の説明者によると、「一回のフライトに二年間は訓練をする」という。ここに並んだ機器の配線は地球を三周するといふから驚きだ。素人目で見ると、どれも



ハイテクロジの機器に見えるが、案内の女性はこの最新のシステムはそそる必要がある」と説明していた。これは宇宙開発を国民にアピールするアメリカ流のやり方なのかもしれない。何とおおっぴらだ。説明を聞いて、ロウ飛行士のやる通信の仕事はディレクターでも権限の及ばないシャトル内との連絡を一手に行うのが分かった。ロウ飛行士と話している時は、ビンと来たが、彼の声でシャトルに乗った飛行士が目的の仕事を遂げたかどうか最初の発表されるかもしれないのだ。二十五人の一人に入らなくても大丈夫だが、その責任者だから大したものだというのが、やっぱり分かった。あの時、ひたすら仕事だ。せひ頑張ってくれ!」と言えよ。自分のカンの悪さを今でも悔やんでいる。